

中国地方で3団体受賞

バイオマス利活用優良表彰

バイオマス利活用に
関しての優良な活動を
顕彰する「バイオマス
利活用優良表彰」の17
年度の受賞者が発表さ
れた。

農林水産省や他日本
有機資源協会等が16年
度から行っているもの
で、17年度は農林水産
大臣賞など24点を表彰
した。中国地方ではN
PO法人・森のバイオ
マス研究会（広島県庄
原市）が農村振興局長

賞、中外炉工業（大阪
府）が（財）日本有機資源
協会会長賞、岡山県総
合畜産センター（岡山
県久米郡）がバイオマ
ス活用協議会会長賞を
受賞した。受賞者の活
動内容は次のとおり。

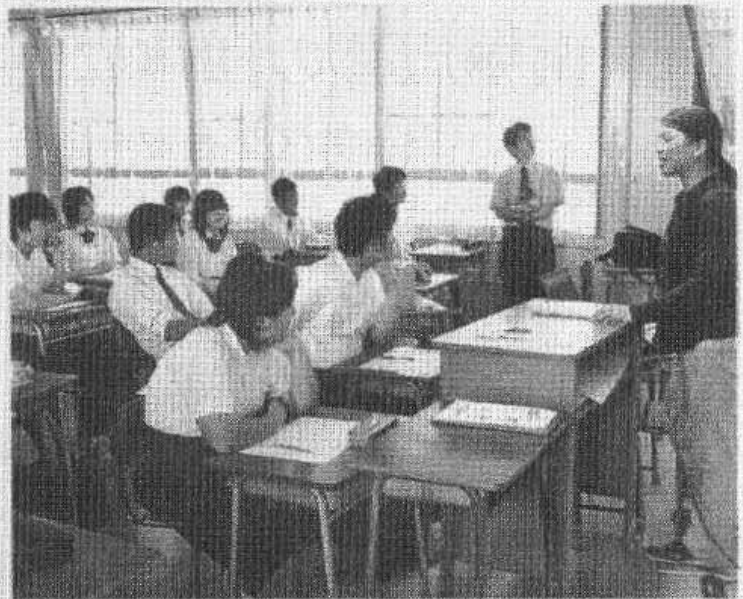
▽NPO森のバイオ
マス研究会「資源循環
型のまちづくりを目標
としての活動、ペレット
ストーブの普及啓発活
動」

▽中外炉工業「山口
市での間伐材等木質バ
イオマスの実用規模の
ガス化発電システムと
燃料副産物の有効利用
の検討」

▽岡山県総合畜産セ
ンター「家庭生ゴミと
家畜排せつ物の堆肥化
の取り組みとメタン発
酵による発電」

環境や途上国支援で活躍 4人が「生き方」熱く 庄原中 創造する大切さ指摘

庄原市の庄原中で十三日、環境問題や発展途上国支援など東北地域で活躍する四人が、三年生を対象に「生き方」について講演した。進路や職業適性などを考えるキャリア教育の一環で、四人は



「夢を形にできる仕事」と、森のバイオマス研究会の取り組みを話す徳岡さん（右端）

信念を持つ大切さを強調した。

カンボジアの農業支援活動をしている県立大三

年の菱亮一さん(25)は

「他人のために生きるこ

とをしたかった。やりた

いと思ったときに始める

ことが大事」と呼び掛け

た。森のバイオマス研究

会の徳岡真紀さん(32)は

「身近な生活の在り方を見直せば、世界を変えることもできる」など話した。

このほか「コンピューターゲームなどのようにおせん立てされた遊びからではなく、考えて創造

することから自分の本当の力を育てられる」との指摘もあった。

(坂田一浩)

(7月27日)

第11回
分権自治推進集会
特 集 号

自治労ひろしま

広島県労働組合連合会 広島県労働組合連合会 広島県労働組合連合会
広島県労働組合連合会 広島県労働組合連合会 広島県労働組合連合会
広島県労働組合連合会 広島県労働組合連合会 広島県労働組合連合会

毎月1日、10日、20日発行

広島県労働組合連合会
銀行部
〒730-0001 広島市東区

電話 082-251-1111

2006年10月2日

豊かな地域社会をめざそう

「2006 政策提言」を市民団体と参加者で議論

三分科会

(課題)

環境・エネルギー

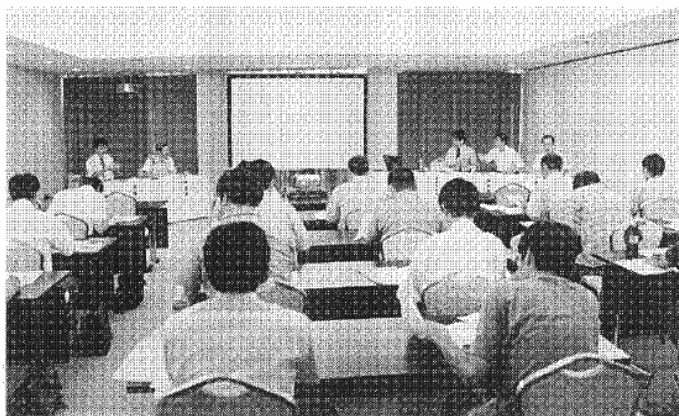
「持続可能な社会」をキーワードに、①ごみの低減化、②水田環境の維持、③持続可能な林業について、各研究会の代表者が政策提言の内容を報告し、参加者の質問を受けて議論しました。

また、特別報告者としてNPO法人「森のバイオマス研究会」の三谷明さんを、助言者として広島大学の中越信和教授をお招きし、課題解決のために何をすべきか、地域での活動経験を基に話をいただきました。

「持続可能な社会」をキーワードに、①ごみの低減化、②水田環境の維持、③持続可能な林業について、各研究会の代表者が政策提言の内容を報告し、参加者の質問を受けて議論しました。

「利便性の恩恵から抜け出すのは容易でない」「国内の米や木材を消費することは大切だが、担い手の生活が成り立つような基盤整備から着手すべき」といった感想も出されました。

最後に、中越先生が、「今、必要なのは、情報と知識を持つている行政職員自らが地域の活動を支援すること。退勤前の一時間、全職員が地域のために働くための時間



第三分科会

【4面に続く】

命の森に感謝こだま

県内で全国育樹祭

県立中央森林公園(三原市)を主会場にした第30回全国育樹祭が22日開かれ、関連した緑化推進やまき割りなどの行事が、県内各地であった。秋空の下、多くの参加者が紅葉が始まった森林と親しんだ。(1面関連)

家族連れら里山体験

●広島

サテライト会場の広島市東区福田町、県緑化センターの多目的広場では、ドングリの工作教室やヒノキの丸太切りの体験コーナーなどがあり、親子連れでにぎわった。センターで植物の世話や管理をしている市民ボランティアが子どもたちと一緒に切り方を伝授。府中町の小学六年久繁優洋君(12)は「切るたびに、ヒノキのいい香りがした。お風呂に入れて温泉気分を味わいたいです。」と同じくサテライト会場の市森林公園(東区福田町)では、形を整えるとともに日当たりを確保できるヒノキの枝打ちを約二百人が体験。市民ボランティアの二団体がのこぎりやチェーンソーで枝を切り落とすコツを教えた。(山本聖太郎)

●東広島

龍王山中腹に広がる憩いの森公園では、野鳥観測や木工などの催しがあった。龍王山は西条の酒造りに使われる伏流水の源流部に当たり、市民で山の手入れをする「山のグラウンドワーク」には約三百五十人が参加。家族連れや学生らがのこぎりを手に、森の斜面の下草や枝を刈って整備した。東広島市の広島大二年生布庭央さん(19)は「森林の保全に貢献できてよかった」と満足そうだった。(藤原直樹)

●庄原

「かんぼの森では、里山の食材がたっぷり入った料理が、リユース(再利用)食器で振る舞われた。地元「森のバイオマス研究会」が六年前から整備している森は、下草が刈られ、間伐も行き届いている。参加者は木漏れ日の中で、「里山汁」や竹筒で炊いたご飯などを味わった。使い捨て食器は一切なく、食べた人は食器を自分で洗っていた。庄原市の県立広島大、谷口美智留さん(19)は「大量に捨てられる食器が気になっていった。リユースの輪が広がってほしい」と願っていた。(藤元康之)

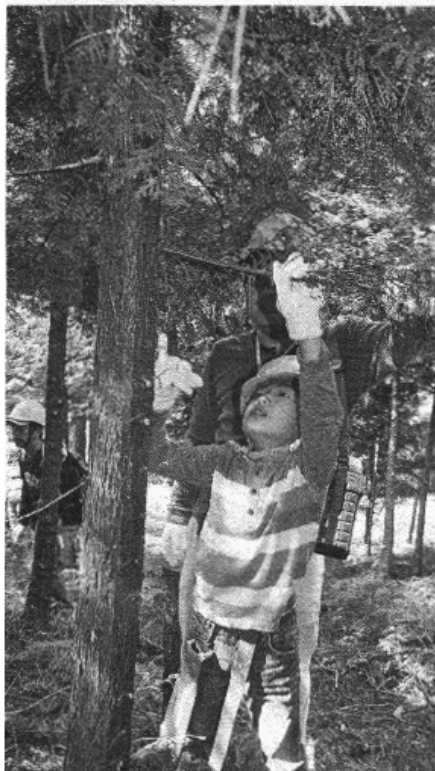
●三原

式典会場では、子どもたちが森の役割をダンスや音楽で表現した。隣接の「ウエルカム広場」では、県が森林づくり活動を紹介するパネルを展示。里山林育成の重要性や地球温暖化防止を訴える内容に、来場者たちが見入っていた。大高校でつくる県学校農業クラブ連盟が育てた花や農産物の展示もあった。(岡田浩一)

●廿日市

県立もみのき森林公園(吉和)には、約四千人が詰めかけた。神楽が盛んな土地柄から、特設会場の「森のコンサート」に、西中国山地の三神楽団が出演した。地元の古和神楽団の「摩訶」で幕開け。金糸銀糸の衣装で勇壮に舞うと、観客約二百五十人から歓声と拍手が上がった。塩瀬(安芸高田市)、宮乃木(広島市安佐北区)の両神楽団も熱演した。

枝打ち／下草刈り／太鼓鑑賞／恵み味わう



親子で協力して広島市森林公園のヒノキの枝打ちをする参加者



庄原市の「かんぼの森」会場で、食器を洗ってリユースに協力する参加者たち



三原市の式典会場に隣接したウエルカムステージで太鼓演奏を披露する尾道市立吉和中の生徒たち

間伐の大切さなどを学ぶ

庄原小、比和で森の子塾



中村所長（右端）から間伐の大切さについて説明を受ける児童たち



庄原市比和町の森の中に設けられた屋外教室で二十七日、庄原小六年を対象にした環境体験学習会「アサヒ・森の子塾」があった。アサヒビールと同小が初めて開催。間伐で森を守る大切さや地球温暖化問題などを学んだ。

同社が所有する「アサヒの森」に、間伐材で作った丸太いすを設置。児童八十八人が参加

した。

同社庄原林業所の中村成孝所長が「間伐によって日光が当たり下草が生えることで、水害に強い山ができる」と説明。森が地球温暖化の原因となる二酸化炭素を吸収していることも話した。

広島市安佐南区の環境機器ベンチャー「シユオ」の西本清宏専務(47)は、木くすからガソリン

の代替燃料を製造する研究を紹介した。

続いて、庄原市の特定非営利活動法人(NPO法人)「森のバイオマス研究会」の徳岡真紀事務局長(32)の指導で、ペレットを猫や鳥の形に組み合わせて絵馬に張り付けるクラフト作りに挑戦した。

松島由佳さん(12)は同市西本町は「木の香りに包まれて気持ちよく勉強できた。環境を守る大切さが分かった」と話していた。(梨本晶夫)

ペレットストーブ普及を

中区で討論 庄原での事例紹介

間伐材や木くずなどを固めたペレットを燃やすストーブの普及を考えるフォーラムが十八日、広島市中区であり、庄原市の事例紹介などを通じ

て、木質バイオマス（生物資源）の利点や今後の課題を探った。

行政職員ら約百人が参加した。特定非営利活動法人（NPO法人）の森

のバイオマス研究会（庄原市）理事長で明治大農学部早田保義教授が基調講演。「二酸化炭素の排出量が減らせるなど環

境に優しく里山の再生にもつながる」と利点を強調した。

先進地として庄原市と岩手県葛巻町の取り組みを報告。家庭の声などから設置コストやペレットの安定調達などの課題が浮かんだ。

フォーラムは都道府県の女性林業技術職員でつくる「レディースネットワーク21」の主催。十九日は庄原市でワークショップを開く。（村田拓也）

「木くずからエタノール」実証実験へ

豊かな森を活用 産業誘致に期待

総面積の84%を森林が占める庄原市内で、木質バイオマスを活用した新産業の誘致に期待が寄せられている。市の後押しを受けて来年も、ガソリンの代替燃料であるエタノールを製造する実証実験が始まる。景気が低迷する中山間地域の起死回生策となるか。

(梨本晶大)

実証実験をするのは、ジュオン(広島市安佐南三次市で間伐材から排ガ区)と、産業技術総合研究所がエタノールを製造している。研究所バイオマス研究センターの環境機器ベンチャーのター(具市)。

地域活性化へ市も支援

市が、同市是松町の庄原工業団地内に実証実験施設を新築する。鉄骨平屋百平方メートルを目標に、二〇二二年三月まで無償で貸し出す。建築費は千五百万円。市が九月に打ち出した新産業の誘致を目指す「庄

1トン40〜60円
ニットのビニキヤスキに

含まれる一トのセルロースから、二百五十一二百八十製造できる。副産物を使うため材料費が六十四に抑えられる、と

ジュオンの西本清宏専では、建築廃材などに含

市の産業団地構想は、残材などを活用したペレット製造工場の誘致も目指す。市は、年間五百トの需要があればビジネスとして成り立つと試算する。ペレットストー

八谷恭介代表は「問い合わせも多くなっている。最近の異常気象を受け、あらためて環境に配慮したストーブが注目されているのでは。原油高の影響もある」と話

原森のバイオマス産業団地構想」の最初の事業となる。

エタノールは、溶液製造で残った木くずに含まれているセルロースを酵素で糖化してグルコースを生成、さらに酵母を加えることで発酵させて製造する。これまで百トン



収集システムの実証実験で搬入される山林を手入れして出た木材

まれる塗装や接着剤、くさなど不純物があるものは使えない。このため出どころがしっかりした原料が必要」という。

ジュオンは、実証実験一年ほどでめどをつけたい考え。その後は工業団地内に、排ガス浄化溶液やエタノールを製造する工場を建設する構想もある。

さらに市は本年度中に、国からの交付金を受けやすくなる「バイオマスタウン」の申請をする。市企画課の中本淳課長は「地球の温暖化防止に貢献するだけでなく、誘致が実を結べば雇用が生まれる。地域の活性化につながる」とも、中山間地域のモデルにした」と話している。

クリック

エタノール 天然ガスや石油から合成する「合成法」と、糖化、発酵、蒸留の過程を経て製造する「発酵法」がある。「発酵法」の原料には、白糖

などの糖質原料、パレイシヨなどの繊維原料の3種類がある。木材を糖化する場合は希硫酸を使用していたが、効率が悪く環境に悪影響を与えることが課題だった。

ペレットストーブ登場

三次の自治「環境問題考えて」 連合会が設置



和田コミュニティセンターに
設置されたペレットストーブ

環境を柱にまちづくりを進める三次市の和田自治連合会が六日、地域の拠点である和田コミュニティセンターにペレ

ットストーブを設置した。センター内のロビーにストーブを置いて煙突を取り付けるなどの作業

後、着火。来館者たちが早速、火のぬくもりを味わっていた。ストーブは、間伐材や木くずを固めたペレ

ットとまきの両方を燃やせるタイプ。二酸化炭素の排出量が減らせるのに加え、里山の再生に生かせるため導入した。

ストーブは早朝や来館者があるときに、従来のエアコンの代わりに使う。為貞勇三事務局長は「サロンのようにここに集い、ストーブで沸かした湯でお茶でも飲みながら、環境問題を話すきっかけになってほしい」と話している。

(二井理江)

バイオマスフォーラム 3日にふれあいセンターで

しょうばらバイオマスフォーラム(庄原市など主催)が来月3日午前11時～午後5時、西本町の市ふれあいセンターである。シンポジウムは午後1時開会。NPO法人バイオマス産業社会ネットワークの泊みゆき理事長が「バイオマス産業の現状と未来」と題し、銘建工業の長田正之取締役総務部長が「森に生かされたくらしと産業創造」と題し基調講演。

早田保義・明治大教授(NPO法人森のバイオマス研究会理事長)らパネラー5人が「バイオマスが私たちの暮らしと地域を創る」をテーマにパネルディスカッション。コーディネーターは県立広島大の野原健一地域連携センター長。

バイオマス・環境関連機器などを紹介する「くらしのバイオマスフェア」が午前11時から開かれる。バザーや親子のウッドクラフト教室も。無料。バイオマス研究会事務局(73・0721)。

広島



バイオマス

新産業へ本格始動

間伐材など 実験棟近く建設 有効利用

長引く林業不況にあえぐ庄原市が、地球温暖化防止や持続・再生可能エネルギーとして注目されている木質バイオマスの活用を柱にした新産業創出事業に乗り出した。県内一の面積があり、しかもその84%が森林で占められている同市。市の悲願である「里山再生」の切り札となるか。

(馬屋原清市)



バイオエタノールの量産化に向けた実証実験棟が建設される工業団地の一角。庄原市は松町で

中国自動車道・庄原インターに近い庄原工業団地の3万9380平方メートルの空き地の一角に、間伐材や製材の木くずを使ったバイオエタノール量産



バイオマス

NP0法人バイオオマス産業社会ネットワークによると、bio biomassは「生物資源」という意味の生造学用語。1974年の第一次石油危機以後、バイオエタノール(サトウキビなどから

化の実証実験棟が近く建設される。「実験が成功すれば、この空き地一帯がバイオオマス関連の稼働施設になることも夢ではない」。事業を推進する

つくる燃料用アルコール)などの生物資源を指すようになった。最近では、化石燃料以外の原料でつくられたバイオマスプラスチックや植物繊維など、工業原料にも使われる生物資源にも使われている。

市地域振興部企画課の根波裕治さんは語った。実験を担当するのは環境機器ベンチャー企業「ジューン」(広島市安佐南区)。今月8日、庄原市役所で同社の西本徹郎社長と瀧口季彦市長が

事業推進の協定書に調印した。「木質バイオオマス分野の事業を発展させた会社側と、里山再生に主眼を置いた雇用促進につなげたい市の考えが一致した」と國光拓自・市地域振興部長は話した。協定にはエタノール製

造のほか、木質チップボイラーによる熱供給、船舶の排ガスのすずを取り除く浄化液液などの関連事業も含まれる。市は新年度予算で8350万円を計上。実証実験を支援したり、固形燃料にしたペレット用のストロープ30台を小学校などに導入したりと、バイオオマス環境の整備につとめる。推進母体となっている

のが、庄原市など産学官32団体でつくる「SAR Uプロジェクト会議」。1月には県内で初めて農水省認定のバイオオマスタウン構想を策定した。だが、今月3日に同市内で開かれたフォーラムは思わぬ波紋を広げた。

パネリストとして出席したのはNP0法人「バイオオマス産業社会ネットワーク」(千葉県柏市)の泊みゆき理事長、地元

の同「森のバイオマス研究会」理事長の早田保義・明治大教授ら5人。ガソリンの代替としてエタノールを製造する産業の可能性について慎重意見が相次いだためだ。パネ

リストの1人は、ガソリンが1リットル150円という中で、事業化の困難さを指摘。「経費がかさむエタノール製造で一気に企業化に進むより研究開発の一分野にとどめておいた方が無難だ」と語り、

これに対して、「ジューン」の西本清宏専務は取材に対して「確かにエタノール単体だとそうした意見も出てくるでしょうが、エタノール以外に高付加価値製品を生む技術開発もしているのだから、企業化への問題は少ないと思う」と話している。早ければ08年度にも操業にこぎつけたという。

の中で、自然とバイオオマスエネルギーへの関心が深まり、それが市民へと広がったという。学生によって始まった小さな流れが、住民も行政、企業も巻き込んで、大きな流れに変わっていった経緯が面白い。

県立大開学がきっかけ

「ひと言」ここに行き着くまで、の歴史をたどる。1989年4月、同市七塚町に開学した県立大学までさかのぼることが出来る。当時、キャンパスの周囲にはなにもな